

青年期における自我同一性地位と自我状態 (1) Ego Identity Status and Ego State of Adolescence

小林 厚子
(東京成徳大学)

Atsuko KOBAYASHI (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究は、自我同一性地位と自我状態について、保育学科の学生について調査し検討した。自我同一性地位としては、同一性達成 (identity achievement ; A)、モラトリアム (moratorium M)、早期完了 (foreclosure ; F)、同一性拡散 (identity diffusion ; D) 疎外的達成 (alienated achievement ;AA) を各自が自己評価で選択した。自我状態としては、東京大学心療内科で作成した TEG を用いた。自我同一性地位の早期完了(F)のみが、TEG のいくつかの側面において、他の A, M, D, AA と異なっていることがわかった。また、A, M, D, F, AA の違いと、TEG の自我状態との関係として特徴的な傾向は得られなかった。本研究の被験者において、自我同一性地位の M が少なく、D 状態に 50% 存在していた。
キーワード：自我同一性地位、自我状態、エゴグラム、青年期

1. はじめに

子どもが成長し、社会的に適應していく上で自我発達が必要であり、生涯発達に関する代表的な臨床心理学的理論として、Erikson (1959)による人生周期 (lifecycle) に即した漸成的理論 (epigenetic theory) が検討され研究されてきている。近年は、小此木(1978)以来指摘されている、青年期における心理社会的モラトリアム (moratorium)の状態からいつまでも卒業できず、自我同一性の拡散 (identity diffusion)している青年が、ますます増加して来ている (石谷 1994)。Mercia, J. E. (1966) は、青年期における自我同一性 (ego identity)、およびその特徴を危機 (crisis)があるかないか、傾倒 (commitment) がどの程度かという指標から、同一性達成 (identity

achievement 以下図・表中 A と略す)、モラトリアム (moratorium ; M)、早期完了 (foreclosure ; F)、同一性拡散 (identity diffusion ; D)、の4種類に分類した。さらに、Orlofsky, J. L.ら (1973) は疎外的達成 (alienated achievement; AA)を見出して追加している。疎外的達成とは、「心理社会的な危機の中で、社会的には受け入れられにくい仲間内だけの価値観に従い行動し、自分では同一性を達成しているつもりであるが、社会的には拡散地位にいる青年」のことをいう。中西 (1983) は同一性地位の形成に関する実証的研究でこれら5つの特徴が、男女別に、年齢別にどのように変化していくかを研究している。価値の領域における同一性地位を、前述の5つのカテゴリー (A, M, F, D, AA) の中から選択させた結果、高校から大学1・2年、3・4年と進

むに従い同一性拡散 (D) の選択が減少していき、同一性達成 (A) の選択が増加していくことを見出している。大学3・4年になれば、男子の3分の1、女子の4分の1は、自分なりの価値観を身につけているといわれる。しかし、3・4年になっても2・3割の青年はモラトリアム地位にあるとの結果を得ている。

また一方、自我状態と適応の問題は、精神分析の理論により多方面から論じられて久しい。自我についての診断はロールシャッハ法など投影法による研究が多く、その解釈仮説も難解で、熟練した専門家でないといふがむずかしい。アメリカの精神科医である Berne E. が1950年代後半から提唱して発展してきている交流分析 (Transactional Analysis、以後TAと略す) は Freud の精神分析を基にして開発したものであり、精神分析をやさしくしたものである。Berne, E. の弟子である Dusay, J. M. はパーソナリティの構造を機能的に捉える方法として、自我状態をグラフ化するエゴグラムを開発した。日本では東大関係者 (心療内科) が中心になり、1984年に東大式エゴグラム (TEG) がはじめて、1993年には第2版が作られ、広く使われている。Berne, E. がTAの構造分析理論にもとづき5つに分類した自我状態は次のようなものである。CP (Critical Parent) : 批判的な親、NP (Nurturing Parent) : 養育的な親、A (Adult) : 大人の自我状態、FC (Free Child) : 自由な子ども、AC (Adapted Child) : 順応した子ども、以上5つである。これは質問への回答をグラフ化して表し、行動パターンの特徴がわかりやすく、各側面の自我の高低のマイナス面・プラス面や、高く・低くするためのアドヴァイスも明解で説得力がある。また、従来の性格検査に比べ、価値的な良し悪しのニュアンスも少ない。カウンセリングなどの過程で、クライアントにも抵抗無く実施可能

である。しかし、各側面の高低を総合的に考察し、本来もっている能力に気づき、その能力を発揮させるためには、現状の自我状態の自己分析だけでなく、その基準も考慮に入れたいと考える。また、そのような自我状態は生育環境とどのように関係して形成されたか、対人相互関係や、身につけてきた価値観などとの関係なども影響していることがうかがえる。

本論文の目的は、第一に、自我の発達について検討するため、青年期の職業選択において、自分に合った職業として幼稚園教諭・保母・保父を目標として学んでいる青年の自我同一性の状態を調べること。第二に自我同一性地位が、自我状態のTEGによる分類と、どのような関連にあるかを分析することである。第三に、中西らの自我同一性地位を選択させることの妥当性、各項目の説明の妥当性を検討するものである。これらを通じて、自我とは何か、自我同一性地位の発達とは何か、アセスメント法など、これらはどのようにして数量化できるのかについての今後の研究の手がかりとしたい。

2. 方法

調査対象：都内T大学短期大学部1・2年生で保育学を専攻する学生97名 (男性7名、女性90名) 平均年齢 19.8歳

調査時期：2000年12月に心理学の授業中に実施。

調査内容

調査1：自我同一性地位について

中西 (1983) の作成を部分的に解りやすく変更し、自我同一性のうち人生観や価値観に関し、自分自身の確信したあり方を形成し、それに基づいて行動しているか (A) から、いくつかの選択肢に迷い努力中 (M)、親からうけついで

価値観をそのまま確信している (F)、同一性の拡散 (D) と疎外的達成 (AA) の内容を表している文章を示し、読み上げて、簡単に説明して理解させた。5つの各説明文が自分にどの程度あてはまるか、5段階で評定するよう求め、最後に、「A, M, F, D, AAの5つのうちであなたを最もよく表しているものを選ぶとすればどの文章ですか?」との質問に対し、自己判断させ選択するよう求めた。5つの説明文は、次のような内容である (中西 1983)。

A: 私には小さいころからもっていた価値観や信念に疑いをもった時期がありました。……現在は自分の価値観や信念に自信を持っているので、少々のことではそれがゆらいだりすることはないと思います。

M: 小さいころからもちつづけてきた価値観や信念に、今疑問を持っています。……だからもっとよく検討して、私にふさわしい生き方をめざして努力したいと思っています。

F: 私は小さいころからもちつづけてきた価値観や信念にはとくに疑問を抱いたことはありません。……だから私は小さいころからもちつづけてきた価値観や信念が私にふさわしいものだと思っています。私の価値観は両親の価値観と似ているようです。

D: 私は価値観とか信念とかいうものには、あまり関心がありません。だからあまり考えたこともありません。……ただ今の私には、これが自分の生き方だ、と自信をもって言えるものがないし、一つに決めてしまうのがなんとなく不安です。

AA: 私には小さいころからもってきた価値観や信念に疑問をいだいた時期がありました。そして自分なりに結論に達することができました。……古いならわしに従うのがいやだ、人と親密に話し合ったり、助け

合い、協力していくことのできるような社会に参加したい、という結論です。

調査2: 自我状態について TEG (東大式エゴグラム) 第2版 (東京大学医学部心療内科・編) により調査した。

1: 言いたいことを言えない。

2: 誰とでも騒いだりはしゃいだりする。

……

59: 人間関係を大切にする。

60: 人の意見を参考にする。

の60項目について、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の中から1つを選択する。「はい」の答えには2点、「どちらでもない」の答えには1点、「いいえ」の答えには0点をつけて、集計する。集計するのは、各項目が、CP、NP、A、FC、ACの各自我状態に該当するかが示されていて、各自我状態の点数を導く。

3. 結果および考察

調査1 自我同一性地位の結果は次の通りである。(図1)

A: 12名 (14.3%)、M: 11名 (13.1%)、F: 8名 (9.5%)、D: 42名 (50.0%)、AA: 11名 (13.1%)

この結果は、同一性拡散 (D) が50%と非

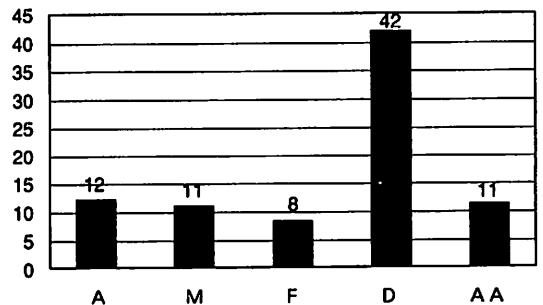


図1 自我同一性の分布

表 1 TEG の平均値・個数・標準偏差

	CP	NP	A	FC	AC
A の平均	6.416667	16.5	10.25	13.16667	12.91667
A の個数	12	12	12	12	12
A の標準偏差	4.25245	3.5291	4.6147	4.427873	6.052172
M の平均	8.090909	14.90909	8.727273	11.18182	13.63636
M の個数	11	11	11	11	11
M の標準偏差	2.981763	4.459923	4.429242	4.261882	4.295875
F の平均	9.875	13.625	9.125	13.125	10.125
F の個数	8	8	8	8	8
F の標準偏差	4.051014	4.501984	3.270539	4.12094	4.051014
D の平均	7.428571	14.85714	9.02381	11.78571	12.54762
D の個数	42	42	42	42	42
D の標準偏差	4.548615	3.339135	3.294401	3.612551	3.663947
AA の平均	6.727273	16.27273	9.636364	11.63636	13.63636
AA の個数	11	11	11	11	11
AA の標準偏差	3.466725	2.195036	3.042128	3.905707	4.388

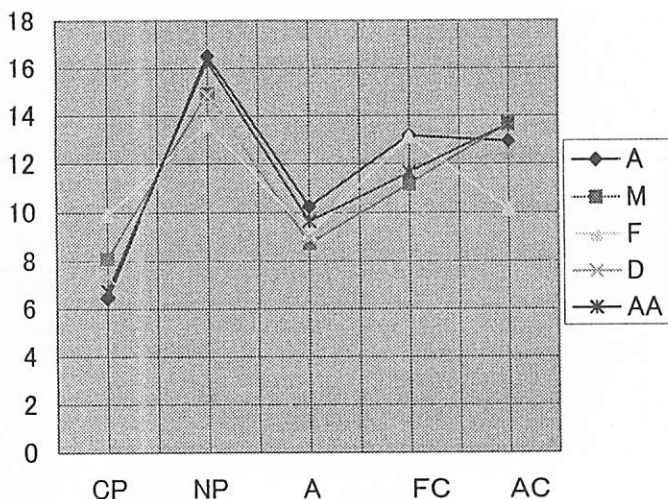


図2 自我同一性とTEG

常に多いことが、特徴的であり、中西（1983）の同年齢の大学教養生の 24.3%と、医療技術短期大学部看護科生 2 年生の 37.5%よりかなり多い。これは、最近の若者の一般的傾向か、1 年の年齢差かもしれない。また、疎外的達成 (AA) も多く、あるひとつの生き方に傾倒して

いる、ひとりよがりの面が強い。

調査 2 A, M, F, D, AA 別の各得点の平均と標準偏差は次の通りである。(表 1。図 2)

グラフから大体の結果が読み取れるが、自我同一性の、F (早期完了) が、他の、A、M, D, AA と、CP, NP, A, FC, AC の得点分布において異なる傾向が見られる。これを、平均値の有意性検定、分散分析法等により分析した。

(1) TEG の CP の値と自我同一性地位 (A, M, F, D, AA) の関係

CP の値において、はっきりとした有意な差があるのは、F と A (有意水準 0.085)、F と D (有意水準 0.134)、F と AA (有意水準 0.096) だけであり、わずかに差があるのが、F と M (有意水準 0.312) である。他の 2 つの自我同一性の地位の違いは、TEG における CP と得点に有意な差は認められない。(表 2。表 3。表 4。表 5)

(2) E G の NP の値と、自我同一性地位 (A, M, F, D, AA)

の関係

NP の値において、有意な差があるのは、F と A (有意水準 0.152)、F と AA (有意水準 0.159)、だけである。他のどのような 2 つの自我同一性の地位の違いも、TEG における CP と得点に有意な差は認められない。(表 6、表 7)

表 2 CP の得点比較 F-A(t 検定)

	F	A
平均	9.875	6.41666667
分散	16.4107143	18.08333333
観測数	8	12
仮説平均との差異	0	
自由度	16	
t	1.83335498	
P(T <=t) 片側	0.04271058	
t 境界値片側	1.74588422	
P(T <=t) 両側	0.08542115	
t 境界値両側	2.11990482	

表 3 CP の得点比較 F-D(t 検定)

	F	D
平均	9.875	7.292682927
分散	16.41071429	20.41219512
観測数	8	41
仮説平均との差異	0	
自由度	11	
t	1.617364131	
P(T <=t) 片側	0.067045615	
t 境界値片側	1.795883691	
P(T <=t) 両側	0.134091229	
t 境界値両側	2.200986273	

表 4 CP の得点比較 F-AA(t 検定)

	F	AA
平均	9.875	6.727272727
分散	16.41071429	12.01818182
観測数	8	11
仮説平均との差異	0	
自由度	14	
t	1.775262778	
P(T <=t) 片側	0.048794391	
t 境界値片側	1.76130925	
P(T <=t) 両側	0.097588782	
t 境界値両側	2.144788596	

(3) TEG の A の値と、自我同一性地位 (A, M, F, D, AA) との関係

TEG の A の値において、どのような2つの自我同一性地位の違いも、有意な差は認められない。

表 5 CP の得点比較 F-M(t 検定)

	F	M
平均	9.875	8.090909091
分散	16.41071429	8.890909091
観測数	811	
仮説平均との差異	0	
自由度	12	
t	1.055028159	
P(T <=t) 片側	0.156095767	
t 境界値片側	1.782286745	
P(T <=t) 両側	0.312191534	
t 境界値両側	2.178812792	

表 6 NP の得点比較 F-A(t 検定)

	F	A
平均	13.625	16.5
分散	20.26785714	12.45454545
観測数	8	12
仮説平均との差異	0	
自由度	13	
t	-1.52132141	
P(T <=t) 片側	0.076062371	
t 境界値片側	1.770931704	
P(T <=t) 両側	0.152124742	
t 境界値両側	2.16036824	

表 7 NP の得点比較 F-AA(t 検定)

	変数 1	変数 2
平均	13.625	16.27272727
分散	20.26785714	4.818181818
観測数	8	11
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	-1.535979709	
P(T <=t) 片側	0.079458966	
t 境界値片側	1.833113856	
P(T <=t) 両側	0.158917933	
t 境界値両側	2.262158887	

(4) TEG の FC の値と、自我同一性地位 (A, M, F, D, AA) との関係

TEG の FC の値において、どのような2つの自我同一性地位の違いも、有意な差は認められない。

青年期における自我同一性地位と自我状態（1）

表 8 AC の得点比較 F-AA(t 検定)

	F	AA
平均	10.125	13.63636364
分散	16.41071429	19.25454545
観測数	8	11
仮説平均との差異	0	
自由度	16	
t	- 1800876317	
P(T <=t) 片側	0.045299875	
t 境界値片側	1.745884219	
P(T <=t) 両側	0.09059975	
t 境界値両側	2.119904821	

表 10 AC の得点比較 F-A(t 検定)

	F	A
平均	10.125	12.91666667
分散	16.41071429	36.62878788
観測数	8	12
仮説平均との差異	0	
自由度	18	
t	- 1.235717973	
P(T <=t) 片側	0.116224181	
t 境界値片側	1.734063062	
P(T <=t) 両側	0.232448362	
t 境界値両側	2.100923666	

表 9 AC の得点比較 F-D(t 検定)

	F	D
平均	10.125	12.41463415
分散	16.41071429	12.99878049
観測数	8	41
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	- 1.487784919	
P(T <=t) 片側	0.085491187	
t 境界値片側	1.833113856	
P(T <=t) 両側	0.170982375	
t 境界値両側	2.26258887	

表 11 自我同一性地位と TEG の分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P- 値	F 境界値
標本	25.52083333	1	25.5208333	1.994649919	0.165223	4.07266
列	273.875	2	136.9375	10.70272156	0.000175	3.219938
交互作用	102.0416667	2	51.0208333	3.987671552	0.025964	3.219938
繰り返し誤差	537.375	42	12.7946429			
合計	938.8125	47				

(5) TEG の AC の値と、自我同一性地位 (A, M, F, D, AA) との関係

TEG の AC の値において、有意な差があるのは、F と AA (有意水準 0.091)、F と D (有意水準 0.171)、F と A (有意水準 0.232) だけであり、他のどのような 2 つの自我同一性地位の違いも、有意な差は認められない。(表 8, 表 9)

(6) 以上の基礎的な分析をもとにして、自我同一性地位の (F, AA) と TEG の因子 (CP, NP, AC) との間の分散分析を行なうと次の結果が得られる。(表 11)

F と AA の違いが、CP, NP, AC の得点の違いとして現れるかどうかは、確率の項を見れば、0.165 であるから、ほぼ異なるパターンとなる

表 12 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F境界値
標本	18.75	1	18.75	0.944811038	0.33660861	4.072660431
列	345.79167	2	172.89583	8.712207558	0.00068387	3.219938094
交互作用	104.625	2	52.3125	2.636022795	0.08347238	3.219938094
繰り返し誤差	833.5	42	19.845238			
合計	1302.6667	47				

ことがわかる。

(7)自我同一性地位の (F, A) と TEG の項 (CP, NP, AC) との間の分散分析を行なうと次の結果が得られた。(表 12)

4. まとめと今後の課題

Marcia, Orlofsky らにはじまる自我同一性地位の違い、A、M、F、D、AA が、バーンにはじまる自我状態を表す TEG における、CP、NP、A、FC、AC、の得点の違いとなって現れるかの分析を行なった結果、F (早期完了 foreclosure) 以外の、A、M、D、AA、の間には、TEG の得点の違いは認められない、という結果となった。

A、M、D、AA とともに、その程度の違いはあれ、これまで抱いていた価値観や信念に疑問を抱いている点では共通している。A はそれが自分の中で確立し、自分の価値観や信念に自信をもっている。M はそれに近づく過程にあり、D はまだ暗中模索の段階であり、AA は自分の価値観を確立し、その内容も協調性、社会奉仕というはっきりしたものになっている。これらの、価値観や信念に疑問を抱き、その解決の段階の違いは、TEG が表す自我状態、CP、NP、A、FC、AC の違いとなっては現れない、異なる性質のものであることがわかる。もっとも、部分的には、協調性、社会奉仕といった価値観にたどり着いている、AA (疎外的達成) のグル

ープでは、やはり、TEG における NP の得点が高い (相手に共感、同情する。世話好き。相手を受け入れる。奉仕精神が豊か。弱いものをかばう)。ゆえに、AA が若者らしい理想的な好ましい面も多いといえよう。

はっきりと自我同一性を確立し、しっかりと自分の価値観や信念を持っている A (同一性達成) についても、TEG の NP の得点は高い。

この結果から、F と A の違いが、CP、NP、AC の得点の違いとして現れるかどうかは、確率の項を見れば、0.337 であるから、それほどはっきりではないが、ほぼ異なるパターンであるといえる。

(1)自我同一性地位と TEG の CP 得点について

TEG との関係で見ると、自我同一性地位における、F (早期完了) が他と違いがはっきりしている。F に分類された者は CP の得点が他の A、D、AA と有意に差があり、高い得点を得ている。F の CP における得点 9.88 は、TEG によれば、70 % 以上のパーセントに入っている。すなわち、9.88 以上の高得点は、30 % に過ぎない。自我同一性の F に属するものは、自分の目標と親の目標の間に不協和音がなく、どんな体験も、幼児以来の信念を補強するだけになっていて、硬さ、融通のきかなさが特徴的である。一方、CP の得点が有意に高い者は、そのプラス面として、「理想を追求する。良心に従う。ルールを守る。スジを通す。義務

感、責任感が強い努力家」という面がある。

自我同一性地位において、F（早期完了）に属するものは、マイナス面として、「タテマエにこだわる。中途半端を許さない。批判的である。自分の価値観を絶対と思う」という面を持つことが指摘できる。

自我同一性の他のグループ、A、M、D、AAに属するものには、TEGにおけるCPの得点がFの者より低く、6点台、7点台である。彼らは、「おっとりしている。融通性がある。ワクにとらわれない。柔軟さがある。のんびりしている。」というプラス面を持つようになる一方、「いいかげんである。けじめに欠ける。批判力に欠ける。規律を守らない」というマイナス面が現れやすくなる。A、M、D、AAの間では、プラス面、マイナス面は特に差は見られない。自分の価値観や信念について程度の差こそあれ疑問に感じ、新しい価値観や信念を模索したり、獲得しているものについては、その、程度の差は、CP得点の高低とは異質の性格をもっていることがわかる。強いていえば、M（モラトリウム）に属するものが少しA、D、AAにくらべて、プラス面が強く出ている。

(2) 自我同一性地位と TEG の NP 得点について

TEG の項目の中で、NP の得点が他より高いのは、TEG 自身の性格によるものであり、NP 得点が 16 で、70 % の範囲であるから、CP と相対的な違いはない。NP 得点の中ではやはり自我同一地位の F（早期完了）のグループが他と違いを見せている。F の者の NP 得点は一番低く、A、AA と有意な差を持っている。

自我同一性の F に属するものは、自分の目標と親の目標の間に不協和音がなく、どんな体験も、幼児以来の信念を補強するだけになっていて、硬さ、融通のきかなさが特徴的である。一方、TEG における、NP の得点が低いという

ことは、プラス面として、「さっぱりしている。淡泊である。周囲に干渉しない。」という面を持っている。マイナス面としては、「相手に共感、同情しない。人のことに気を配らない。温かみがない。」という面を持つことが指摘できる。自我同一性地位が、A、M、D、AA の者は、一度は自分の価値観や信念を疑問に持ったのであるが、新しい価値観にどの程度向かっているかという程度は、TEG の NP とは関係が見られず、異質の性格であると考えられる。

(3) 自我同一性地位と TEG の AC 得点について

自我同一性地位の 5 つの分類の中で、TEG の AC 得点に違いがあるのは、F とその他である。自我同一性地位において、F（早期完了）に属する者、すなわち、幼児のころから親の価値観と同じ価値観や信念を持ち、疑わない者は、TEG の AC 得点が有意に低い値をとっている。すなわち、プラス面として、「自分のペースを守る。自主性に富む。積極的である」と言う面を持ち、マイナス面として、「相手のいうことをきかない。一方的である。近寄り難い印象を与える。」という面が指摘できる。

自我同一性地位において、その他の、A、M、D、AA に属する者は、何らかの形で今までの価値観や信念に疑問を抱いたのであるが、彼らは、TEG の AC 得点が高く、プラス面として、「協調性に富む。妥協性が強い。イイ子である。従順である。慎重である。」という面を持ち、マイナス面として、「遠慮がちである。依存心が強い。我慢してしまう。おどおどしている。うらみがましい」という面を、F のものよりも多く持っている。

(4) 自我同一性地位の違いと、TEG の違い

自我同一性地位の 5 つの分類、A、M、F、D、AA と、TEG の 5 つの自我状態の尺度、CP、NP、A、FC、AC の得点とはどのような関係

にあるかを全体として考察する。自我同一性の F (早期完了) のみが、その他の A、M、D、AA と異なった CP、NP、A、FC、AC の値を示す。

F (早期完了) と、AA (疎外的達成) の違いは、TEG における、CP、NP、AC 各得点の違いとなって表れている。しかし、A、D、FC の違いは、CP、NP、AC の各得点の違いとは対応していない。

F (早期完了) と、A (同一性達成) の違いは、TEG における、CP、NP、AC の各得点の違いとなって表れている。しかし、F と AA の違いほどは顕著ではない。A、D、FC の違いは、CP、NP、AC の各得点の違いとは対応していない。

自我同一性地位の分類と、TEG における自我状態の各項目の得点とがどのような関係にあるかを検討した。自我同一性地位の F (早期完了) のみが TEG のいくつかの項目において、他の A、M、D、AA と異なっていることがわかった。A、M、D、AA の違いは、TEG の得点とは特段の共通の性質を持っていないように思われる。あるいは、自我同一性の分類そのものが、F とその他を区別するのは容易であっても、A、M、D、AA の違いは、必ずしも明確ではなく、今後さらに明確化する必要性を示唆しているとも考えられ、これらが今後の課題である。

文献

- Erikson, E. H. 1959. *Identity and the Life Cycle. Psychological Issues*. International University Press.
(小此木啓吾訳 1973 自我同一性—アイデンティティ—とライフ・サイクル 誠信書房).
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society*. (2nd ed.) W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 I, II みすず書房)
- 石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人的関係性 心理学研究, 42, 118-128
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 551-558.
- 村瀬孝雄 1995 アイデンティティ論考 自己の臨床心理学 誠心書房.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- 中西信男 1983 青年期の自我同一性地位に関する研究 大阪大学人間科学部創立 10 周年記念論集, Pp 398-453.
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社.
- Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. 1973 Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 211-219.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 36, 2389-248.

Ego Identity Status and Ego State of Adolescence

Atsuko KOBAYASHI (Tokyo Seitoku University)

Abstract

This study investigates the relationship between ego identity status and the ego state based on a survey of college students. Ego identity status was determined by the identity achievement (A), moratorium (M), foreclosure (F), identity diffusion (D), and alienated achievement (AA) parameters. The Tokyo University Egogram (TEG) was used to determine the ego state. The analysis shows that of the five ego identity status parameters, the foreclosure (F) parameter showed differentiation between dimensions. 50% of those surveyed were in the D ego identity status.

Key word: ego identity status, ego state, egogram, adolescence